井上完爾校長を悼む

森　本　義　信

昨年4月、井上完爾校長先生は、かねて御療養中でありました副腎皮質ホルモンの分泌異常のため、御永眠になりました。先生はここ数年来、右脚の腓腸筋の筋炎や、交通事故による左脚大腿骨の骨折など、打続く艱難に耐え得ぬ程の苦しみを忍んで来られました。しかしながら、御不幸なことは重なるものでしようか、御持病のロイマチスが近年頃に悪化され、副腎皮質ホルモン剤を特効薬として御使用になつて居られました処、その薬が逆に副腎の機能を低下させる結果となりまして、治療の術が断たれたのでありました。享年56才、まことにお悼しい次第であります。ここに新めて先生の御冥福をお祈り致しますとともに、御生前には日々御懇篤な御指導を賜わりました者としまして、先生の御存命中の想い出などを書き留め、多年の御恩に聊かでも酬いたいものと思います。

先生は姫路の産でありまして、姫路中学に御在学中、旧博物学会の会長を務められました阿部良平先生の御薫陶を受けられまして、博物学を志されました。進んで東京高等師範に学ばれまして、更に深く広く窮められました。特に先生が御興味をお持ちになられ、御研究を続けられましたのは地質学でありました。昭和4年に神戸県一女に御赴任になられましてからは、六甲山を中心とする地質の御研究に沒頭され、日曜毎に必ず山へお出掛けになつたと伺つています。当時の御研究物は兵庫県博雑、東京高師博雑、兵庫県中教博雑などに御寄稿になつておられます。先年、先生が私を呼ばれましたので校長室へ行つてみますと、とても嬉しそうに、神戸市教委が六甲山の国立公園の指定を受けるために作成した申請書のうち、京大の上治寅次郎先生がお書きになつた地質に関する調査書を差出されました。その巻末の引用文献中に先生の論文が数線記載されていました。先生はさも懐しそうに「僕も若い頃は少しは勉強もしたようだ。何んでも書いておくと云うことは大事だな」と謙遜しながらおつしやいました。更に続けて「六甲を調べていると淡路も調べねばならなくなつて淡路も随分歩いたが、淡路にドリーネ（北部淡路のドリネ及び淡路野島村の衝上断層、兵博雑15号）があるんだ。あれを見付けた時には信用してもらえなくて、この上治先生を御案内して説明したんだ」と、これは少し得意そうに話されました。六甲山の地質につきましては、浅学の私にはよくわかりませんが、古い会員の方は御存知と思います。

先生が大変な御勉強家であることは、ずつと以前、私が甲殻類の研究を始めました頃、甲殻類に関する原書を一冊下さいました。5～600頁に亘る大きな本ですが、各頁にチエツクがあり書き足されていました。甲殻類を御専門にされたわけではないのに何故こんなに御勉強になられたか、今でも私はわかりません。とも角、御勉強家であられたことには間違いありません。私など惰け心を起した時には、この戴いた御本を今でも薬に使つています。

先生は県一女に10年間居られまして、昭和14年に姫路に鷺城中学が新設されました時、姫路へお帰りになりました。姫路に帰られてからは、新設校特有の多忙さと、続く戦争のため、お好きな御研究をなさる機会がだんだんに少なくなられたようです。誰でも勉強の出来ない環境におかれると致し方ないものと思つてしまいますが、先生は絶えず「近頃は勉強しないので」と恥しそうに云つておられました。それだけに責任を感じておられまして、先生御自身の研究は出来なくても、今出来る方々には大いにやつて戴こうというお考えから、生物学会関係のことと、姫路市理科教育会のことに関しましては、一度も首を横に振られたことはありませんでした。この点は私共の是非見習らわねばならないことと思つています。又或る時、生物学会の会費の納入が数ケ月遅れましてひどくお目玉を食つたことがありました。校長職の多忙さと、更に鼎になつておられたこととで、陰から生物学会の発展と、理科教育の振興のための面倒をみておられましたので、この点私共は非常に楽な気持ちでした。

学校内におきましては、私共は先生ならではと云う、まことに合理的な、堅実な、科学者らしい御指導を賜りました。御参考になりますれば幸いと思いますので、このうち二三を御紹介致します。

先ず第一に実物教育、特に生物教育は生徒に実際に見させ、触れさせるものでなければならない。少々時間がかかつても、廻り道をしても差支えない。生物教育の本筋を通すように云われました。私共はややもすると実力考査の成績を気にしがちですが、この点、非常に気楽で充分に実験の時間をとることが出来ました。

次に、生物教室内で使用する校具、或は一部の器具類は自分自身で考えて設計せよということです。これは今になつて感ずることですが、教師自身に考える力と、校具を愛する気持ちを起させると同時に、それを活用させることになります。引いては生徒をして考えさせ、校具を愛し、活用させることにも連がり、まことに科学者らしい躾の教育でありまして感服致します。

（以下9ページへ）

（56ページより続く）

又、生物教室は動的でなければならない。余り綺麗な状態でも、穢くてだらしないのもだめで、こう云うと何んとも難しいことと思われるでしょうが、毎日教師が課外活動の指導に、明日の実験の準備に、少しの時間でも教室内で過すと云うことです。この様に挙げますと限りがない程、いろいろの御教訓が想い出されるのであります。

今、手下にあります十数編の先生の別刷を再び開きまして、堂々たる内容の御研究物を見ます時、熱心な研究家よ、偉大なる教育者よ、もう十年は生きて戴きたかつた、惜しい方を失つたと痛切に思うのです。